

新訂

演習

# 保育内容総論

金澤妙子  
前田和代 編著

岡田たつみ  
金 瑛珠  
佐藤暁子  
鈴木彬子  
鈴木健史  
高橋優子  
戸田雅美  
久富陽子 共著



建帛社  
KENPAKUSHA

## はじめに

昨今、保育が話題になるのは、残念なことに、受け入れ先の不足や不備、労働条件の悪さ、乳幼児の虐待といった悲しい出来事が多い。いずれも早急な解決が求められる重要な問題ではあるが、子どもという存在が私たち大人にもたらす明るさや柔らかさや暖かさ、彼らの発想の豊かさや面白さ、なるほどと思える凄さといった、子どもの世界の魅力ではない。

もし子どもが、感じていること、考えていることを大人と同じように話せるとしたら、今の社会、自分になされている保育についてどう言うだろうか。子どもの気持ちが捉えられていると言うだろうか。

子どもは、大人と同じようには語らない。しかし、その小さな頭とからだ全身で日々様々な体験をし、いろいろなことを感じ、考えている。そして、それを彼らなりの仕方でも表したり、伝えようとしている。

一方、大人の日常は忙しく過ぎ、子どもが発信しているものに気付かないことも多い。現代を生きる子どもと、昔の子どもとが話せたら、お互いの生きる世の保育をどんなふう語るだろうか。今は子どもには生きにくい時代かもしれない。

本書を手取る方々は、保育者を志し、これからその道に進まれる方々、あるいは、すでにその道を歩き出した方々であろう。せめて私たちは、子どもの発信しているものに近づき、それを知る努力をし続ける大人でありたい。また、将来、保育関係の仕事に就かなくても、保育や子どもについて学んだことは決して無駄ではない。子どもや保育について学ぶことは、人間について、今生きている自分について深く考えることである。子どもに寄り添って理解しようとする大人が増えることを歓迎したい。

学校ではいろいろな教科を勉強していることはあまねく知られている。しかし、幼稚園や保育所やこども園などに保育内容があると一般には捉えられていないことが多い。学校に国語や算数があると知っていても、幼稚園や保育所やこども園などに5領域があること、また‘領域’の意味も知ら

れていないだろう。

保育内容は多岐にわたり、教科以上に複雑に絡み合っている。その捉えの歴史の変遷もある。今後さらに議論を尽くし、変革が必要な問題もある。それらは、本書の「Ⅰ. 園生活を通して保育内容を学ぶ」「Ⅱ. 保育内容の捉え方」「Ⅲ. 保育内容の抱える課題」で学ぶことができる。さらに、切り込み方は違っているが、本書のどの章も、具体的な保育の営みや大人と子どものかかわりの実際に触れ、理論的なことを保育事例等で押さえている。保育実践の場が様々なことを教えてくれることは確かだが、「保育を学ぶには実践が大事で、教科書は机上の空論だ」などと言われないように、そして、「保育を学んだ」という実感がもてるように力を尽くした。しっかりと学び、子どもの気持ちに寄り添える大人になろうではないか。

そういう保育者がひとり増えると、その保育者から保護者へと、少しずつ子ども理解の大切さが伝わり、子どもにとってよりよい保育、「子どもの最善の利益」（子どもの権利条約、保育所保育指針）を第一とする保育や社会が実現されるに違いない。

本書は『演習 保育内容総論』として、2009（平成21）年に初版を発行した。その後、2014（平成26）年の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」告示を受けて、2016（平成28）年には第2版として改版した。そしてこの度、2017（平成29）年に告示された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂（改定）を受けて、さらに内容を見直し、一部で新たに執筆陣も加えて「新訂」として発行することとなった。これまで同様、ご活用いただければ幸甚です。

2019年3月

編者 金澤 妙子

## モデルカリキュラム「保育内容総論」における到達目標と本書の対応項目

<b>(1) 幼稚園教育の基本に基づく指導の考え方の理解</b>	
〈一般目標〉	
幼稚園教育の基本を踏まえた幼稚園における指導の考え方を理解している。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児期の教育における見方・考え方について、具体的な事例を挙げて説明できる。	第1～8章
2) 遊びを通しての総合的な指導の意義と教師の役割が説明できる。	第1・2・7・8・13章
3) 幼稚園教育における幼児理解に基づく評価について説明できる。	第1・7・8・13章
4) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続について説明できる。	第11章
<b>(2) 発達を見通した指導計画作成の理解</b>	
〈一般目標〉	
幼稚園教育における指導計画の考え方を理解し、幼児の発達の過程を見通した指導計画作成を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼稚園教育における指導計画の考え方について説明できる。	第10章
2) 長期の指導計画と短期の指導計画との関係について説明できる。	第10章
3) 具体的な幼児の姿から指導計画を作成する手順と配慮について説明できる。	第9・10章
4) 指導計画の評価の考え方について説明できる。	第10章
5) 幼児にとっての行事の意味を理解し、園行事の在り方を説明できる。	第6章
<b>(3) 幼稚園における具体的な指導の理解</b>	
〈一般目標〉	
幼児の興味や関心や発達の実情などに応じた具体的な指導の在り方を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児の実態に沿って、物と人との関わりを深める視点から教材を工夫する力を付ける。	第2・10章
2) 保育記録を書くことを通して、幼児を理解する力を付ける。	第1・9・10・12・13章
3) 模擬保育を通して、ねらい及び内容に沿って総合的に指導する力を付ける。	第1～8・10・11章

# 目次

## I. 園生活を通して保育内容を学ぶ

<b>第1章</b>	<b>子ども理解と保育内容</b> .....	1
1.	保育内容の所在.....	1
	(1) 一人一人の体験の質	1
	(2) 体験の質を見る保育者	3
	(3) 保育者の見る目の自覚化と検討	3
2.	かかわりに表れる子ども理解.....	4
3.	子ども理解に絡むもの.....	6
	(1) 様々な価値観—子ども観・保育観・しつけ観・ 生活観・遊び観など	6
	(2) 状況性・時期	7
	(3) 関係性	7
	(4) 子どもへの願い・ねらい	7
4.	子ども理解の難しさを超えて.....	8
5.	理想と現実の狭間で、なお理想を目指して.....	9
<b>第2章</b>	<b>「遊び」から捉えられる保育内容</b> .....	11
1.	はじめに—発達を培う遊び—.....	11
2.	事例から捉える保育内容.....	12
	(1) 乳児の遊びの捉え方	12
	(2) 1歳児から3歳未満児の遊びの捉え方	13
	(3) 幼児の遊びの捉え方	14
3.	おわりに—生きる力の基礎を育むために—.....	19
<b>第3章</b>	<b>「生活」から捉えられる保育内容</b> .....	21
1.	様々な生活場面に見る保育内容.....	21
	(1) 食 事	21
	(2) 排 泄	23
	(3) 休息や睡眠(午睡・昼寝)	25
	(4) 清 潔	26

(5) 片付け	28
2. 子ども理解と生活場面のかかわり	28
3. 生活場面に見る養護と教育	29
<b>第4章 「環境」から捉えられる保育内容</b>	<b>31</b>
1. 子どもの育ちと環境	31
2. 人的環境	33
3. 物的環境	34
4. 室内の環境	36
5. 戸外の環境	37
6. 家庭環境	39
7. 地域や社会の環境	40
<b>第5章 「発達」から捉えられる保育内容</b>	<b>42</b>
1. 各年齢のおおよその発達	42
(1) 乳児の発達と保育	42
(2) 1歳児から3歳未満児の発達と保育	44
(3) 幼児の発達と保育	46
2. 保育における発達の捉え方	48
(1) おおよその発達が分かることの大切さ	48
(2) 一人一人の育ちに寄り添うために	49
3. 事例からの理解	50
(1) 発達・育ちの理解	50
(2) 育ちに寄り添う	51
<b>第6章 「行事」をめぐって</b>	<b>53</b>
1. はじめに	53
2. 子どもにとっての行事の意味	54
(1) 行事の特性	54
(2) 園の行事の特性	55
3. 保育内容としての行事を考える	56
(1) 入園式と修了式一同じようで子どもにとっては 全く違うもの	56
(2) 子どもが主体となって進める行事	58

4. まとめとして	59
-----------	----

## II. 保育内容の捉え方

### 第7章 保育内容の捉え方とその背景 61

1. はじめに	61
2. 「幼稚園教育要領」の歴史的変遷における 保育内容の捉え方	62
(1) 1948年発刊『保育要領』における 保育内容の捉え方	62
(2) 1956年発刊『幼稚園教育要領』における 保育内容の捉え方	63
(3) 1964年改訂『幼稚園教育要領』における 保育内容の捉え方	64
(4) 1989年改訂『幼稚園教育要領』における 保育内容の捉え方	64
(5) 保育実践を展開する中で	65
3. 教育課程編成の枠組みとしての「保育内容」の捉え方	66
(1) 幼児教育・保育の構造	66
(2) 保育内容に関する2つのイメージモデル	68

### 第8章 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども 園教育・保育要領における保育内容の捉え方 72

1. 要領と指針について	73
2. 乳幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と保育内容	74
3. 3歳以上児の保育内容と領域の捉え方について —幼稚園教育要領から考える—	75
4. 保育における養護について —保育所保育指針と幼稚園教育要領の比較から考える—	77
5. 3歳未満児の保育内容—保育所保育指針から考える—	79
(1) 乳児保育における保育内容	80

### Ⅲ. 保育内容の抱える課題

#### 第9章 様々な配慮を必要とする子どもの園生活と保育内容 ..... 82

##### [1] 障害のある子ども, 特別な配慮が必要な子どもの

##### 園生活と保育内容 ..... 82

1. 理解するということ ..... 82
  - (1) 子どもたちの生活の場であるという普遍性を理解する 83
  - (2) 一人一人を理解する  
一人子どもたちの関係性を理解する 84
2. 個別配慮に基づいて保育するということ ..... 85
  - (1) “私”の理解に基づく個別指導計画 85
  - (2) 保育記録を書く行為からの子ども理解 87
3. 他機関との連携を図るということ ..... 88
  - (1) すでに他機関に通っている場合の連携 88
  - (2) 他機関への“初めの一歩”を支える保育者の役割 91

##### [2] 「外国とかかわりのある子ども」の園生活と保育内容 ..... 92

1. 「文化」と一人一人の状況への配慮 ..... 92
2. 幼稚園での事例を通して ..... 92
  - (1) 相手の文化を受け入れる 92
  - (2) 日本語ができない混乱を受け止める 94
  - (3) 連携・協働 95
  - (4) 母語の保持も大切に 96
  - (5) 長期の休みへの配慮 96
  - (6) 食事への配慮 97
3. 子どもに寄り添う指導計画の作成 ..... 98
4. まとめとして ..... 99

#### 第10章 指導計画の構想と実践 ..... 102

1. はじめに ..... 102
2. 保育内容領域から捉える指導計画  
(領域の視点からの指導案) ..... 103
3. 子どもの姿から捉えた活動に由来する指導計画  
(主活動に由来する指導案) ..... 106

4. 園生活の連続性から捉えた指導計画 (保育者としての指導案).....	110
<b>第11章 小学校との連携・接続</b> .....	<b>114</b>
1. はじめに.....	114
2. 幼児の小学校への思いと憧れ, 期待, 不安.....	115
3. 要領・指針における連携・接続について.....	117
4. これまでの連携・接続における課題と改善点 についての教師間の話し合いからの学び.....	120
5. 連携・接続のあるべき姿を目指しての 具体的な取り組み.....	122
<b>第12章 広がりゆく保育と保育内容の工夫・課題</b> .....	<b>124</b>
1. 延びていく保育時間, その現状と課題.....	124
2. 多様化する保育, その実際と工夫.....	126
3. 家庭や地域社会との連携.....	129
<b>第13章 保育者の専門性と保育内容</b> .....	<b>132</b>
1. はじめに.....	132
2. 子ども理解に基づく保育者の専門性.....	132
(1) 多様な視点から捉える子ども理解	132
(2) 記録による子ども理解	135
3. 教職員の連携による資質の向上.....	135
(1) 日々の保育実践における連携	135
(2) 保育者の質の向上につながる 園内研修・園外研修での学び	136
(3) 保育内容と評価	138
4. おわりに.....	139
<b>付 録</b>	
幼稚園教育要領 (抄).....	140
保育所保育指針 (抄).....	148
幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (抄).....	154

# 第1章

# 子ども理解と保育内容



### 予習課題

1. 幼稚園教育要領解説第1章総則 第1節幼稚園教育の基本を読む。
2. 保育所保育指針解説第1章総則1 保育所保育に関する基本原則を読む。
3. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説第1章総則第1節1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本, 2 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の目標を読む。

## 1. 保育内容の所在

小学校時代のことは、年齢的にも在学年数的にも多くの人の記憶にあり、小学校における学習内容とは何かと問われれば、算数や国語などの授業を思い浮かべる人は多いだろう。そう、小学校の学習内容は、教科書に詰まっている。小学校に学習内容があるように、幼稚園、保育所（以下、保育園）、認定こども園には保育内容がある。では、幼稚園や保育園等の保育内容とは何だろうか。幼稚園や保育園等には教科書はない。幼稚園や保育園等の保育の中身である保育内容は、どこにあるのだろうか。

### (1) 一人一人の体験の質

幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領という国の保育の基準に反して、世の中には、〇〇教室が出前をしているような園や勉強を教えるような園がある。あなたが、過ごした園もそうだったかもしれない。しかし、たとえそういう幼児期を過ごしても、あ

るいは、それゆえにか、保育者を志す多くの人たちは、子どもと楽しく遊び、共に生活しながら、生まれて数年しかたっていない子どもに、社会に出たら必要なことを教えてあげたい、伝えていきたいと思っていることだろう。そして、それを保育内容だと何となく思っているのではないだろうか。これはあながち間違いではないが、同じ遊びをしていても、個々の子どもがその遊びに感じている面白さも違えば、そこで個々の子どもが体験していることもそれぞれに違っている。つまり、同じ遊びをしているから子どもの中で起こっていることも同じである、とは言えない。このことは遊びにとどまらず、園で子どもが行っているすべてに言える。

園庭で1人石に腰を下ろしている子がいるとする。ほほをなでる心地よい初秋の風と太陽で温まった石の温かさを感じている子も、目の前で繰り広げられる遊びに興味をもって見ている子も、外側からは一様に「1人で座っている」と見えても、その中身、心の動き、体験は異なっている。いつも元気からだを動かして遊び、さして食べ物の好き嫌いのない子は保育園の給食が大好きだが、偏食が激しく食べられるものが少ない子は、その時間を決して楽しいとは感じていないだろう。自分の分のおかずの皿を席に持っていく時から歩く速度がゆっくりになる子もいる。「♪おべんと おべんと うれしいな」とか、「おいしい給食をいただきます」という昼食の時間によく使われる歌やあいさつのフレーズのようなわけにはなかなかいかない。それが、たとえ小さくても生身の、それぞれの生活や好みを背負った、一人一人固有の人間が集まっている保育の実際である。

これは何も子どもに限ったことではない。今、この授業を聞いているあなた方は、同じ時間、同じ場所で、同じ講義を聞いている。早く終わらないかなと思って聞き流している人もいるだろうし、興味深く聞いている人もいることだろう。みんなが、同じ聞き方をしていないはずである。そう考えると、保育の中で、子どもが同じことをしていても、体験していることが異なるのは納得のいくことではないだろうか。人間が生きているとはそういうことである。

## (2) 体験の質を見る保育者

それゆえ保育者は、子どもが1人で、あるいは何人かで遊んでいても、遊んでいなくても、クラスで一斉活動をしていても、そこにいる一人一人の子どもが何を体験しているのか、どんな気持ちなのかを考えながらかわる必要がある。そうでないと、子どもの気持ちに添う、子どもの目の高さになる保育は実現できない。子どもを見る保育者が、そこにいる子どもの体験の質をどう見るか、どう理解するかによって、その子がよりよく育っていくために何を願うかという方向性は異なり、当然具体的なかかわり(環境構成、言葉がけを含む)も異なってくる。保育者の子どもの見取り、子ども理解とは、常に保育の基底をなす重要なものである。

## (3) 保育者の見る目の自覚化と検討

保育者の見る目も大切である。私たちはだれしも生きていく中で、自分の考え方の傾向をもっている。自分なりの見方、価値観がある。癖もある。それは、いけないことではなく、生きるとはそういうことである。だが、それを不問にして子どもを捉えることは、子どもを自分と対等な1人の人間として見ることにはならないだろう。たとえ、まだ数年しか生きていなくても、大人との間に歴然とした差異が多々あるとしても、私たち大人と同じ人間として尊厳をもって見るという、現行の指針や教育要領の子ども観に立つならば、子どもを見、その体験について云々する大人の見目、ひいてはそれをつくっている様々な枠組みや価値観を共に検討する必要があるだろう。

最初の問いに戻ろう。幼稚園や保育園等の保育内容はどこにあるのだろうか。保育内容は、保育者と子どもの間にある。保育者のその子を見る目が保育内容をつくるのである。これは、小学校以上の教科教育の学習内容の在り方と大きく異なる点である。それゆえ、子どもを理解する自分(保育者)の見目を検討するためには、自らの枠組みや価値観、見方の癖を自覚化する必要がある。自覚化されていなければ検討できないからである。

「保育とは何か」という問いにあなたはどうか答えるだろうか。「保育とは……である」という言説、表現の仕方は人それぞれに違うだろう。だが、子どもをより悪く育てようとする人はいない。保育という行為は、子どもをよりよく育てる営みなのである。しかし、「よりよく」というよさの中身は人それぞれに違う。そこに価値の問題が含まれている。何をもって「よさ」とするかは、その子を見る人にかかっている。それゆえ、子どもを見る大人の価値観や枠組みの自覚化と検討が必要になる。

## 2. かかわりに表れる子ども理解

### 事例1-1 まだまだ、遊んでいる 3歳児 5月 S大附属幼稚園

帰る時間が近付いてきた。実習生もいて、隣の絵本コーナーでは、何人かの子が絵本を読んでもらっている。担任が、<sup>(a)</sup>「帰り支度を促す言葉」がけをすると、実習生もその方向へ働きかける。ほとんどの子が、それまでしていた遊びに区切りをつけ、帰り支度をやる。しかし、A子だけは、ホールでトランポリンをしている。実習生が呼びに行ってもクラスに入ろうとせず、担任が行くが、A子は一向にその気配はない。担任は、<sup>(b)</sup>「A子をそのままにして、ひとまず帰りの会をして、迎えに来ていた保護者に子どもを渡した」。その後担任は、ホールで遊んだり、プールサイドに行ったりしている<sup>(c)</sup>。A子に、母親が待っていると告げた。それでも帰ろうとしないので、母親が玄関（クラスの入り口）から「お父さんに言いつけるわよ!」と一声。父親は厳しいのか、その時だけは「ヤダー!」と言うものの効き目はない。担任は、<sup>(d)</sup>「母親と相談し、(帰るまねをして) いなくなってもらった」。母親が帰ると言っても、A子はトランポリンで飛び跳ねている。

やがて、実習生も掃除を終えて、A子に、「まだ遊んでるの、みんな帰っちゃったよ、私も帰るね」と言葉をかけ帰って行った。皆が降園シーンとした雰囲気の中、担任も<sup>(e)</sup>「電気を消し、開いていた窓に鍵をかけカーテンを閉めるなどして最後の確認をしだすとホールも一層静まり返った」。その雰囲気からA子は「ママー!」と言って小走りにあちこちへ母親を探し回る。

<sup>(f)</sup>「ママもう帰ったんじゃないかしら、何度もA子ちゃんのこと呼んだでしょ」と担任。A子は泣きながら「帰るー!」と地団駄を踏む。<sup>(g)</sup>「まだその辺にいてくれるといいけど、先生急いで見てくるわね」と担任。ほどなく小走りに戻った担任が、「お母さんは（幼稚園の門ではなく）大学の門で待っていたわ

が求められているとする。こうした場面で子どもはどんなふうにもゾウをかくだろうか。様々な子どものゾウをかく姿を想像してみよう。画用紙の下から太い脚をかき出す子、脚もからだもかかないがゾウの横顔の耳を画用紙一杯にかく子もいるだろう。また、画用紙いっぱいに顔をかき、長い長い鼻先に赤でリングをのせ、ちょうどゾウを見ていた時、ゾウが飼育員からリングをもらって、クルリと鼻を回してそれをパクリと食べたところに出くわして、一同歓声をあげて見とれたところを一生懸命表現しようと苦心している子もいるかもしれない。画用紙に頭も胴体もない2本の太い脚だけをかき、その間から水が出ている絵をかいた子もいる。大人は見過ごしてしまうかもしれないが、ちょうど子どもの目の高さのあたりにゾウのおしっこが出るところがあり、見ている時にシャーとバケツの水をひっくり返したようなおしっこが出たことを印象深くかいたのである。

往々にして子どもは自分が印象深く感じたゾウをかく。子どもがどこからかき始めるか、ゾウの何をかくか、どこをていねいに表現するか、どこに苦心しているか、一人一人の姿をよく見て、共感することはできそうだ。また、動物園でその子が見たり感じたりしたことを思い出すような言葉をかけてあげるなど、体験をより確かなものにして、ゾウを表現する手助けになることもできそうだ。

一人一人の体験に着目する保育内容の捉え方は、あなたが子どもを理解する、子どもの目線になるということを諦めさえしなければ、「保育者主導の一斉保育の園」でも生かされ、子どもとあなたの関係を強くしていく。



### まとめの課題

1. 保育内容の捉え方をしっかりと押さえよう。
2. 事例1-1の文中の下線(a)~(h)のかかわりを、自分ならどうするか考えてみよう。それは何を願ってのことだろうか。
3. 5節の子どもの様々なゾウをかく姿は、ほかにどのような姿が考えられるだろうか。そして、考えたその姿にあなたはどのような言葉をかけたり、行為をするだろうか。その言動には、どのような願いがあると考えられるだろうか。書き出してみよう。